

日中両軍將兵の死を悼んで 松井大将が興亜観音を建立

静岡県の熱海市は、むかし程ではないが温泉街として今も賑わいを見せている。その東端の伊豆山温泉街を見下ろす山腹に、「興亜観音」と呼ばれる美しい観音像が、遙か中国大陸と向き合って建っているのを、知っている人は少ない。仮に知っている人も、その由来まで知る人は殆どいないだろう。

この観音像は、昭和十五年二月、陸軍大将松井石根の発願によって建立された。

將軍松井は、若い頃からの日支友好論者であった。儒学者で尾張藩士の松井武劔を父に持つ石根は、もとより漢学の素養もあつたが、陸軍軍人（士）となつても、支那駐在勤務を度々経験し、陸軍きつての支那通であつた。

その松井は昭和八年に予備役となつていたが、支那事変勃発とともに応召され、中支那方面軍司令官となり上海、南京の攻略戦の最高責任者として指揮をとることになった。

松井は、南京攻略戦に当たつて、先ず市民を犠牲にせぬよう敵司令官唐生智に対して降伏勧告を行い、攻



興亜観音像（露座）



本堂内陣に安置された興亜観音像

撃が始まっても孫文を祀る中山陵やその他の歴史遺産への砲撃を禁じるなど、格段の配慮を行なっている（本シリーズ第一巻第三部参照）。松井は昭和十三年、日本に帰国すると伊豆山に居を構えるが、戦いを通じて日支両軍に多くの戦死者を出したことを悼み、彼我平等にその霊を供養したいと考えた。そこで、激戦地となった上海、南京地域の「戦場の土」を取り寄せ、愛知県常滑と瀬戸の陶工の手により観音像二体を制作することから始めた。そして、松井の住いの向かいの山の中腹に観音堂を建設し、一体を露座、もう一

体を堂内に安置し、昭和十五年二月二十四日開眼式を執り行なつた。本堂には、日本戦没者の位牌と並んで、同じ大きさの「支那事変中華戦没者霊位」の記された位牌が対等に祀られている。

松井は興亜観音の建立後は、険しい道を登って毎日の供養を絶やさなかった。その松井をA級戦犯とし、南京大虐殺の汚名を着せて処刑した行為が、如何に非人道的なものであつたかは今更いふまでもない。

後日譚となるが、処刑されたA級戦犯七名（松井大将を含む）の茶毘後の遺灰が、密かに興亜観音に持ち込

まれた。東京裁判の弁護人を務めた三文字正平氏らの命懸けの尽力によるものである。遺灰は堂守の伊丹忍礼師によって埋葬されていたが、講和条約発効後の昭和三十四年、吉田茂元総理の筆になる「七士之碑」が建立された。翌三十五年春には吉田も大磯から参列して除幕式が行われた。碑の裏面には、七人が手錠をかけられながらしたためた署名が刻名されている。

ちなみに、愛知県三ヶ根山にある「殉国七士墓」は興亜観音からの分灰で昭和三十五年夏に建立されたも

のである。

同碑は、昭和四十六年に過激派によって爆破されるといふ事件が起きた時の傷跡はあるが、露座の観音像（爆破に失敗して無事）と並んで建っており、その横には、「大東亜戦争殉国刑死一〇六八霊位供養碑」と「大東亜戦争全戦没者慰霊碑」もあって、供養が行われている。

これも後日譚となるが、松井大将ら七名の絞首刑執行の責任者は、朝鮮戦争の際、米軍の第八軍司令官として武功を挙げた米陸軍のヘンリー・ウォーカー中将であった。昭和二十



日本人戦歿者と区別なく中国人の位牌を祀る

五年十二月の暮れ、中将は戦場視察のためジープを運転中に転覆し、車の下敷きとなり殉職した。この日は奇しくも七人が処刑された同月同日の十二月二十三日であった。生き残ったウ中将の副官は、怨霊供養のため後日興亜観音を訪れたという。伊丹忍礼師は、観音像の傍らに同中将の墓標を建て、ねんごろに法要した。いまはこの墓標は残っていない。

興亜観音は、松井大将歿後、これを守る伊丹師夫妻も亡くなり、老朽化が進んで心配されていたが、松井大将の遺徳を顕彰しようとする有志の力で、全国からの寄進をうけ、参



修復された七士之碑（右）



興亜観音本堂

道の整備、本堂前の広場の改修等の工事を行って維持管理を保っている。是非参詣をお願いしたいものである。